常葉大学短期大学部紀要 46 号
5-21　2015.

# 遠藤周作の自然描写Ⅱ

中　村　国　男

## はじめに

一年前、私は本学の「紀要　第四十五号」において「遠藤周作の自然描写」なる論文を発表した。その執筆動機は次の点にあった。

遠藤の多くの作品を論ずるとき、日本人の宗教観と西洋人の宗教観の違いは避けて通れぬ問題であり、私もそれを肯定する者である。しかし、その一方で「遠藤周作論のこういう切り口もあって欲しい」と多くの論者に期待しつつも、なかなか巡り合えない論点がある。それは、遠藤の作品構成の見事さ、とりわけ季節や天気などの自然描写を生かした作品構成である。ただし、自然描写と言っても、花鳥風月などの自然そのものを滔々と描写するということではない。ストーリーの展開や登場人物造形の上での大きな効果をねらった、さりげない季節や天気の描写という意味である。

（常葉大学短期大学部紀要　第四十五号）

論文の内容は、遠藤周作の一般的評価、その一般的評価における遠藤周作の描写力に対する注目の少なさ、「白い人」における自然描写、「沈黙」における自然描写、「私が・棄てた・女」における自然描写、であった。その中でも私が中心に据えたのは、「私が・棄てた・女」におけるヒロイン森田ミツと雨の描写の関連の分析であった。

「白い人」、「沈黙」などが純文学作品と呼ばれるのに対して、「私が・棄てた・女」は中間小説、大衆小説などと呼ばれる（以下、大衆小説と呼ぶ）。大衆小説はとかく軽く考えられがちであるのだが、遠藤周作自身は決してそのつもりはなかった。遠藤周作にとって純文学小説と大衆小説は、言わば車の両輪であった。「私が・棄てた・女」は、この大衆小説の第三作目に当たる。遠藤周作は「私が・棄てた・女」に先立って、「おバカさん」（昭和 34 年 3 ～ 8 月、朝日新聞連載、同年 10 月、中央公論社より刊行）、「ヘチマくん」（昭和 35 年 6 月～ 12 月河北新報他の地方紙に連載、昭和 36 年 5 月、新潮社より刊行）という二つの大衆小説を書いている。

そこで一年前から私が積み残した課題としていることは、「私が・棄てた・女」に先立つこの二作品において、遠藤周作がどのように自然描写を多用しているのかということである。一年前に述べたように、その自然描写は灼熱の太陽や、降ったり止んだりする霧雨の描写で一貫しているのか、それとも異なる気象条件における自然の景物をもって描かれているのだろうか。その点を巡って今回は「おバカさん」について論ずる。

答はこうである。「『おバカさん』においては、晴天、雨と霧、夜空の星の描写が、主要登場人物の三者に振り分けて描かれ、『私が・棄てた・女』よりも多彩な構成となっている。」

この中でも、主人公のガストン・ボナパルトは夜空の星の描写を伴ってしばしば描かれて

いる。星を描写するとなると、明けの明星を除けば夕方から夜に限定される。そういう星、星空を描写に多用したために、主人公の生き方を示す場面は夜に集中してしまう。その制約を補っているのが、他の登場人物に伴って描かれる晴天や雨の描写なのである。論じていくうちにこの点が自然と浮上するようにしたい。

なお、「おバカさん」の本文引用に当たっては、「遠藤周作文学全集」(1999 ～ 2000 年版)に拠るのが最も妥当なところであるが、拙文においては、学生時代に読んでたくさんの書き込みの残る「角川文庫昭和 48 年 5 月版」を用いたことをお断りしておく。

## 1 「おバカさん」の概要

自然描写の論考に先立って、まず「おバカさん」の概要を確認しておこう。

サラリーマン隆盛、ＯＬ巴絵の兄妹の家にフランス人、ガストン・ボナパルトなる人物から手紙が届く。かつて隆盛と文通していた青年であった。パリの東洋語学校で日本語を学び、片言の日本語が読み書きできる。手紙によれば、かのナポレオンの子孫であり、三週間後に横浜港に到着する。来日の目的は定かではないが、隆盛を頼りたいようだ。兄妹をはじめ、家族一同大きな期待と憧れを込めて受け入れ態勢を固めた。

ところが入港した船の中で会ったガストンの容貌は、相撲取りのような長身に、馬のような長い顔と鼻。真に期待を裏切るものであった。以下は巴絵の受けた第一印象である。

巴絵だって若い娘だから自分の家に迎えるフランスの青年に空想や夢をあれこれひそかに描いていた。ましてナポレオン皇帝の末裔ならば、シャルル・ボワイエほどではなくとも典雅でスマートで、そのくせ、どこかたくましい魅力をプンプン発散する男性であれかしと願っていたのは無理もなかった。

それがすべての点でゼロ、ゼロ、ゼロ。

知性のひらめきなど一片だにないこの間ぬけ顔。ボワイエやジュランなど比較するだけでも恥かしい。強いて外国の俳優をさがせば、かの喜劇俳優フェルナンデルの山イモのオバケのような顔に似ているとも言えようか。

(第 2 章　主人公登場)

読者が早くも「おバカさん」とはこのガストンのことなのだろうと察する場面である。

さて隆盛の家に居候して一週間。日本の風俗習慣に疎いガストンは次々と奇行を繰り広げ、巴絵にあきれられるが、文通という形で来日の縁を作った隆盛は、何とかガストンを守ろうとした。

そんなある日。夜の東京を案内するとのことで兄妹と出かけた新宿でガストンは、やくざに絡まれて負傷した。帰宅後、ガストンは突然、家を出て行くと言う。ただし理由は負傷とは関係ない。もっと多くの日本人を知るためだとのことである。

泊るあてもないままに、数日前に見つけた野良犬とともに出発したガストンは、売春婦兼泥棒たちや、いかがわしい占い師の蜩亭老人と巡り合って一夜を過ごす。さらに次の夜には、この小説で大きな鍵を握る殺し屋遠藤に捕捉され、殺人計画に加担させられることになってしまう。

殺し屋遠藤は、太平洋戦争中の原住民殺害の罪を兄だけに追わせ、終戦後に処刑に追いやった二人の上官、金井、小林に対する仇討ちをもくろんでいた。その工作としてガストンを利用しようとしたのである。

小説の後半は、仇討ち達成のためには血も涙もない殺し屋遠藤と、何とかそれを思いとどまらせようとするガストンの応酬が、時に厳しく、時にユーモラスに描かれつつ進展してゆく。ユーモラスなシーンを一箇所だけ挙げておこう。一人目のターゲット金井に向かって殺し屋遠藤が拳銃を発射するシーンである。

ガストンは声をあげた。今まで恐怖のために彼は口もきけず、ぼうぜんと二人の日本人のやりとりをながめていたのである。

「遠藤さん、ノン、ノン」

「ガス、お前も一緒にはいんな。……もしだれか来たらな……おれとここを見物に来たようなふりをするんだぜ」

「遠藤さん」ガストンも必死で叫んだ。「イヌさん、好き」

「……」

「遠藤さん、コドモさん、好き」

「……」

「遠藤さん、イヌさん、好き。コドモさん、好き。わたし知ってる。わたし、遠藤さん、コドモさん好きなこと知っている」

このガストンの叫びを耳にした金井は血だらけの手を合わせて、

「なあ、あんた。おれにも妻も、子供もあるのや。子供が二人もあるのや」

遠藤の手がすこしふるえた。たしかに、この殺し屋の心はガストンの叫びに動かされたにちがいなかった。

だが——

その動揺した心に反抗するように、遠藤は拳銃を握りなおすと、体を起しかけた金井の額に銃口をむけて引金を引いたのである。

国電がまぢかの高架線を通りすぎていった。作業場の物音はひときわ高く、はげしくひびいた。

時は——まひるに、近かった。

セメント袋にしがみついた金井の血まみれの指が尺とり虫のように動いたが、遠藤はぼうぜんとして自分の拳銃を見つめていた。彼はまだ、前後の事情がはっきりのみこめないようだった。

二度、三度、引金をひく。

だが、愛用のコルトはむなしい音をたてるだけ。拳銃が火を吹いた時、いつもてのひらから腕を通して全身に感じるあのショックと快感のかわりに——

カチリ、むなしく、にぶく、バネがまわるだけなのだ。カチリ、弾がぬかれているのである。

（第８章　信ずることと疑うこと）

ああ、ついにガストンも殺人の片棒をかついでしまったかと思われたこの場面。殺し屋遠

藤の拳銃からこっそりと弾を抜いておいたのはガストンであった。金井が命からがら逃げ出した後、遠藤が怒ったのは言うまでもない。殴り、蹴り、ガストンを気絶させて去って行った。

倒れているところを発見されたガストンは、一旦は隆盛・巴絵兄妹の下に戻る。しかし、ガストンは山形に向かった殺し屋遠藤に会いに行くと主張する。遠藤は「わたしのトモダチ」だと言うのである。たとえ相手が殺し屋であろうと、トモダチとして殺人を思いとどまらせようとする愚直なまでのガストンの信念。今までさんざん陰でガストンをバカ呼ばわりしてきた巴絵は、圧倒されつつガストンに対する認識を改める。次の場面は、この小説のタイトルに関わる部分である。

（バカじゃない……バカじゃない。あの人はおバカさんなのだわ）

はじめて巴絵はこの人生の中でバカとおバカさんという二つの言葉がどういうふうに違うのかわかったような気がした。素直に他人を愛し、素直にどんな人をも信じ、だまされても、裏切られてもその信頼や愛情の灯をまもり続けて行く人間は、今の世の中ではバカに見えるかもしれぬ。

だが彼はバカではない……おバカさんなのだ。人生に自分のともした小さな光を、いつまでもたやすまいとするおバカさんなのだ。巴絵ははじめてそう考えたのである。

（第 9 章　星よ光れ）

さて、小林を殺すために山形に行った殺し屋遠藤の後をガストンは追う。さんざん探し回った末に、小林の店で遠藤を発見した。肺病が悪化してきた遠藤は、突然現れたガストンに驚きながらもガストンに再び殺人の下働きをさせようと目論む。翌日の早朝、山中の沼で遠藤と小林は格闘となり、それに割って入ったガストンは、小林からシャベルで何度も殴打されながらも、遠藤を守る。次には銃口を向けられた小林を守る。やがて肺病による体力低下と格闘の疲れの果てに遠藤は気絶し、恐怖を感じた小林は逃げ去る。遠藤が息を吹き返したとき、既にガストンの姿はなかった。三日後に沼からガストンの上着が発見されたものの、ガストンの死体は上がらず、行方は分からない。

ただ、遠藤は気絶していた際、一羽のシラサギが真白な羽をひろげながら、飛び去っていくのがうつろな目にうつったと言う。それを伝え聞いた隆盛は、小説の最後でこう思った。

（ガストンは生きている。彼はまた青い遠い国から、この人間の悲しみを背負うためにノコノコやってくるだろう）

（第 13 章　しらさぎ）

## 2 「おバカさん」の評価

善きにつけ悪しきにつけ、極めて個性の強い主人公を据えるのが大衆小説における遠藤周作の手法である。その出発点に当たるのが「おバカさん」のガストンである。以下、「ヘチマくん」の豊臣鮒吉、「私が・棄てた・女」の森田ミツと続く。男女の違いはあるものの、おおむね顔は不細工、動きは鈍重。よくぞ主人公に起用されたものだとあきれるような人物

たちである。しかし、読者に憐憫と、そこはかとない優越感を掻きたてる、このような不細工な主人公が、読み進むにつれてたまらない魅力を感じさせて行く。それが遠藤周作の作戦である。その後、生涯にわたって遠藤周作が次々と誕生させた大衆小説の主人公の魅力あふれる人物像の原型が、「おバカさん」には、はっきりと表れている。

その人物像とは、「無償の愛の実践者」と言ってよい。「自己犠牲を犠牲と感じない楽天的な博愛の人」と呼んでもよい。広石廉二氏も著書の中で「私はガストンの無償の愛の行為がどういう形で報われるかを期待しながら読んでいた」と述べている。(「遠藤周作のすべて」朝文社)

この「無償の愛」は、全ての人間は信頼し合うべき同胞であるとの認識という形を取って、ガストンの日本における最初の外出らしい外出の体験で示されている。隆盛・巴絵らと新宿に繰り出し、やくざに絡まれた場面である。

「チョッ、大きな図体をしてヨ、泣きやがってヨオ……」

愚連隊の一人が――手に玩具をもてあそんでいた例の白痴のようなチンピラが、吐きすてるように言ったが、その声はしらじらと流れていった。

「みんな、友だち……」ガストンは途切れ、途切れに訴えた。

「みんな、友だち……」

「……」

「なぜ……なぜ……」

「……」

「なぜ……なぜ……」

見物していた日本人たちは顔をそむけて散らばりはじめた。上着を肩にひっかけていた愚連隊の兄貴もプイと……うしろをむくと歩きだした。なぜかわからぬが、だれもが後味の悪い屈辱感に心をみたされていた。

(第3章　?)

ガストンの博愛の心が、愚連隊のみならず、野次馬の日本人たちに、己の心の貧しさを痛感させる場面である。その後、ガストンは来日して最初の散歩で見つけた野良犬を可愛がった末に、その死に接する。さらには殺し屋遠藤によって、殺人計画に巻き込まれながらも、野良犬(ガストンはこの犬をナポレオンと名付けていた)の死と、殺し屋遠藤の心に潜む悲しい孤独の心を結びつけ、何とか遠藤の心を癒し、命を守ろうとする。以下は、遠藤を追って山形まで行くんだとガストンが巴絵に主張する場面の一節である。

「どうしてもいらっしゃるおつもり」

「はい、巴絵さん」

あの白い陽のさしこむ犬舎のなかで、ムシロにころがっていたナポレオンの死体を見た時――ガストンは突然、遠藤の顔を思いうかべたのだった。

犬の死と殺し屋の映像がなぜ重なったのか彼にもよくわからなかった。犬の死体と殺し屋がこれから殺そうとする男のことが結びついたのであろうか。それともナポレオンのもう動かぬうつろな目が、ガストンに、山谷のぬれた道でせきこんでいたあのあわれな青年を連想

させたのだろうか。

犬舎のなかの犬たちの泣き声。やがて殺されるこれらの動物と同じ運命を遠藤はたどっているのだ。

（第 9 章　星よ光れ）

このような「無償の愛」を、全く「償」とも「無償」とも感じることなく実践できるガストンを識者はどう見ているのであろうか。二つの例を示しておこう。

ガストン・ボナパルト君とは何ものであろうか。一見、馬鹿にしか見えず、他人の言葉をいつも額面通りにうけとり、「イヌさん」をかわいがり、彼にとっては「イヌさん」と同じあわれな人間に見える肺病のインテリ殺し屋遠藤を救おうとして、遠い山形までついて行くフランス青年。そして、最後には、どこへともなく蒸発したように消えてしまう不思議な存在。彼はいったい何者だろうか。彼こそは、日本に再臨したキリストではないだろうか。もとより作者はそんなことはひと言もいっていない。カトリック臭い部分も、この小説では別に目ざわりになるほどではない。だが、彼の善意は、只の善意というには少々グロテスクなところがある。そういって悪ければ、人間ばなれのしたところがある。つまり、それだけ神聖なものを感じさせるのである。

（江藤淳　角川文庫「おバカさん」昭和 48 年 5 月版　解説）

さいはての極東まで来て、日本を信じ、日本人を信じたいと願うこの青年が、作者の夢であることは言うまでもありますまい。そればかりではなくこのフランス人らしからぬフランス人が、イエス・キリストの心をもっともよく身につけることができ、その生涯の痕をたどろうと必死に願っている青年であることは、作者が一言もそれに触れていないにもかかわらず、しぜんに読む者の心に伝わってくるのです。

繰り返して言います。ガストン・ボナパルトはイエス・キリストの再来であります。

（上総英郎 「十字架を背負ったピエロ　狐狸庵先生と遠藤周作」 朝文社）

遠藤周作が小説に登場させる主人公に、イエスやマリアのイメージをかぶらせているという鑑賞法は、多くの識者が指摘していることである。「おバカさん」のガストンについても、江藤氏、上総氏のほか、広石廉二氏、笠井秋生氏らの指摘がある。上記の論に関して、異論を唱える方はいないだろう。ただ、遠藤周作が、新聞小説という多様な思想を持った無数の読者を前提とした発表媒体において、ともするとキリスト教のコマーシャルと受け取られかねない「ガストン＝イエス・キリスト」のイメージを、どれほどアピールしようとしただろうか、と問いたい。答はノウに近いと私は考える。遠藤周作としては、キリスト教色はできるだけ排した方が得策と考えたであろう。江藤淳氏が「もとより作者はそんなことはひと言もいっていない。」と断り、上総英郎氏が「作者が一言もそれに触れていないにもかかわらず」と、周到に条件付けしている所以である。

遠藤周作は、「おバカさん」に先立って、既に「白い人」「黄色い人」「海と毒薬」といった純文学のジャンルで、キリスト教的な倫理観を土台に据えて、日本人の心のありように次々と一石を投じていた。それを受け止めてくれる限られた少数の文学ファンを置いて、今度は

不特定多数の大衆に対して、キリスト教色を抑えに抑えつつ、結果的にキリスト教的な「無償の愛」の世界を垣間見てもらおうか、初めて大衆文学のジャンルに船出するに当たり、遠藤周作はそう考えた。これは「おバカさん」「ヘチマくん」「私が・棄てた・女」という大衆文学初期三作品の一貫した手法を読み取れば、断定してよいことである。

「おバカさん」の主要登場人物は、ガストン、隆盛・巴絵兄妹、殺し屋遠藤である。「無償の愛」を実践するガストン。これを二等辺三角形の頂点に置く。そして右の角には「無償の愛」に次第に気付き、受け入れて行く兄妹、左の角には「無償の愛」を徹底的に唾棄しようとしつつも、その愛の力にじわじわと揺さぶられていく殺し屋遠藤を作者は配置した。
いかにも明快な人物配置を据えた、大衆文学の傑作。これが私の評価である。

## 3 「おバカさん」における自然描写の特質

さて、やっと自然描写について論究する段階に来た。一年前に論じた大衆文学第三作「私が・棄てた・女」においては、主人公森田ミツの健康や心理状態に応じて、天気の変化が描かれていた。では「おバカさん」の場合はどうか。結論を先に言おう。「おバカさん」においては、

隆盛・巴絵兄妹＝おおむね太陽・晴天。

殺し屋遠藤＝おおむね雨・霧。第一の殺しの場面は晴天。

ガストン＝おおむね夜空・星。

といった自然描写の描き分けが行われている。

大衆文学第三作に比べて、第一作である「おバカさん」の方が、各主要人物に多彩で異なる自然描写があてがわれているのである。このことは遠藤周作の作品構成の緻密さ、言いかえれば綿密な計算力を証明している。

実は純文学のジャンルにおいても遠藤周作は早い段階で自然描写を作品展開に活かす手法を用いている。芥川賞受賞作「白い人」において、「私」が無神論のサディストとしての精神形成を図る少年期にはものうい晩春や、アラビアの灼熱の太陽が描かれていた。（このことは一年前にも、私は指摘した。）一方、「私」がナチスの手先となって大学の同胞を自殺や発狂にまで追い詰める後半においては、中部フランスの厳しい冬が描かれていた。

こうして見て来ると、登場人物に応じて自然描写を振り分けたり、登場人物の状況に応じて自然描写に変化を持たせたりするという手法は、遠藤周作の表現技法面の根幹をなすものであると考えてよい。

では、これから主要人物に応じた自然描写の描き分けについて、例を挙げながら論じていこう。

## 4 「おバカさん」における隆盛・巴絵兄妹と自然描写

隆盛は今で言うビジネスマンだが、家では呑気でぐうたら。巴絵は財テクに熱心な才あるＯＬ。呑気で優しいお兄ちゃんと、しっかり者の妹という組み合わせで、ガストンが現れるまでは実に平穏無事な生活を繰り広げていた。おそらく新聞小説として読んだ当時の読者たちも、「大人になっても、こんな兄妹でいられたらいいなあ」と思ったことだろう。

小説は、いかにもこの兄妹にふさわしい春のひとときから始まっている。

梅一輪、一輪ほどのあたたかさが終って――庭のモクレンのつぼみが白くふくらんだ三月下旬の日曜日……
カメの子のように手足をすくめ、ホカホカとした寝床のぬくもりをたのしんでいた隆盛の耳に、
「よく、カビがはえないこと……十時なのよッ」
階段の下から妹の巴絵の、キンキンとした声が響いてくる。
（第１章　ナポレオンの子孫）

まさに「春眠暁を覚えず」である。のどかな上天気の春の朝が思い浮かぶ。ここには太陽の描写はないが、しばらく読み進むと次のような描写も登場する。

巴絵はふしぎに大声をあげず、
「お兄さま」しずかに階段をのぼってきたのである。
隆盛はあわててシャツに首を入れたが間に合わなかった。
朝日のいっぱいあたった障子をサッとあけて――
真白なセーターを着た巴絵は腕を胸に組んだまま、キツい目で見おろしている。
（第１章　ナポレオンの子孫）

静かな日曜日の午前である。隆盛たちの家は都心から大分はなれた世田谷・経堂の住宅地にあるが、この辺は春さきになると庭に小鳥がとんでくる。その小鳥の小さなさえずりが二階の窓のむこうから聞こえて――
下の勝手口で女中のマーちゃんが御用聞きと何かを話しこんでいる声以外には、家の中にはカタリという物音もしない。
あかるい陽が隆盛の顔にあたっている。
（第１章　ナポレオンの子孫）

「あかるい陽が隆盛の顔にあたっている」とあるが、まさにこの小説において、ガストンの人間像を次第に肯定的に受け止めていく隆盛、そして巴絵の兄妹は、太陽、晴天の自然描写がふさわしい。
来日したガストンが、数日後に隆盛の家を出て行ったあと、新聞の小さな記事でガストンの消息を曖昧ながらも知ると、隆盛・巴絵は手掛かりをつかみに出かけていく。その際の天気も四月の強い日差しである。

「お兄さま……よほどガストンさんという人間を愛してらっしゃるのね」
「うむ」隆盛は上の空でうなずいて、「君ア……どうなんだい。ガスさんのこと愛していないのかい」
「あたしが……」巴絵は肩をあげて冷笑した。「ばかにしないでよ。あんな外人、あたし、間抜けって、大きらい」

「そうかねえ、巴絵はまだ本当の男を見ぬく目がないんだなあ……」
ブゼンとして隆盛はつぶやいて、窓外のすっかり夏らしくなった街路に目をやった。
陽がカアッと渋谷の広場を白く照りつけている。

（第７章　わな）

小説の中盤で、巴絵はまだガストンに反発している。しかし、隆盛がガストンの一見すると奇妙な生き方に共感を覚えていることを告白する重要な場面である。その共感の思いが明るい陽射しにオーバーラップしてくる。

この項目の最後に、もう一例だけ挙げよう。巴絵もガストンの愚直な生き方に共感した後、兄とともに山形までガストンを探しに来た。結局、ガストンには会えず、列車で東京に戻る。その車中の場面である。

久しぶりに見る真青な空だった。
さきほど山形駅をすべり出した上野行きの列車は、みどり色の湖のような村山平野のなかを時々、汽笛の音を高くならして、少しずつ速度をましはじめた。
あけはなした窓に涼しい風がながれこんでくる。農家の子供たちが汽車にむかって手をふっている。
隆盛と巴絵は窓にひじをついて真白な入道雲がわいている出羽山系をじっと見つめていた。

（第13章　しらさぎ）

隆盛・巴絵の兄妹は、この小説においてはマラソンか駅伝の中継車のような役割を担っている。小説に明るい雰囲気を絶えず提供しながら、奇人変人ガストンに対する驚愕や反発の思いを次第に共感と賛美へと変えていく。二人は、読者にも同様の変化を促している。「変なフランス人ですね」「とんでもない非常識なバカですね」「でも、優しい人間であることは間違いないですね」「何かなみなみならぬ信念があるんでしょうね」「どはずれた博愛の持ち主なんですね」「ただのバカじゃありませんね。あえて言えばおバカさんですね」……これらの言葉がすべて小説に明記されているわけではないが、読者は、隆盛・巴絵兄妹の会話や行動を通して、言わば「実況中継」の映像と解説にはまっていくという具合なのである。

## 5　「おバカさん」における殺し屋遠藤と自然描写

遠藤周作が、最初の大衆小説において、根っからの悪役を登場させ、その人物に「遠藤」の名を付けたのは、いかにも茶目っけたっぷりの遠藤周作らしい。殺し屋遠藤は、暴力団星野組の殺人専門屋である。しかも、組の仕事とは別に、個人的な理由から二人の男を暗殺しようと考えている。二人の男とは「１」で述べた金井、小林である。二人を探し求める遠藤は、復讐の鬼と化しており、性格的には血も涙もない男である。しかし、遠藤周作は読者の同情をそそる二つのハンディをこの男に仕掛けている。

一つはこの男が肺を病んでいることである。次の引用部分は、ガストンが初対面の夜、男の病を二度目に感じ取る場面である。ガストンは無理やり車に乗せられ、山谷の安宿に向かっ

ている。

目をつむってガストンはガラス窓をうつ雨の音をきいていた。どこかで高い女の笑い声がする。ひきつったような悲しい笑い声である。雨の音は豆をはじくようにはげしくなった。遠藤がまたせきこんだ。そのせきをする声もなにかあわれだった。
「ビョウキ……？」ガストンは小さな声でたずねた。
「……」
「あなた……ビョウキ？」
「ああ……」遠藤は疲れたような声をだした。

（第 6 章　山谷の夜）

しかも、殺し屋遠藤の肺病は、しばしば血痰を吐くほどに悪化している。この小説のクライマックスと言うべき、殺し屋遠藤と、ターゲット小林の格闘に至る「第 11 章　地図」「第 12 章　暗い沼」において、遠藤周作はなんと 19 回も殺し屋遠藤の病の症状を描いている。命を狙われていることを十分承知している小林が、この肺病に伴う体力低下につけこもうとしているほどである。一箇所だけ引用しておこう。小林が戦時中に手に入れて隠した銀の延べ棒を掘り出すために、小林・遠藤・ガストンが山道を登ってゆく場面である。

「休まないか」
もう一歩も歩けぬという風に遠藤は道ばたの石に腰をおろした。そしてあえぎながら両手で頭をおさえている。
時々、霧が山腹の杉の林の間をぬって風に送られてこちらに流れてきた。霧ではない、こまかな雨だった。雨はガストンや遠藤の衣服を通して肌にしみてくる。
ただレーンコートをきた小林だけはそんな心配はいらなかった。背もひくく、セカセカとした彼はやはり昔、将校だっただけはある。思いのほか元気だった。
石の上に倒れるように腰をおろした遠藤の顔を見て、小林のこけたほおには、うすら笑いがゆっくりと浮かぶ。まるで体力のないこの殺し屋をあざけるような笑い方だった。

（第 12 章　暗い沼）

殺し屋遠藤のもう一つのハンディは、三人の男によって事実上、兄を殺されたという暗い過去である。もう少し詳しく言おう。殺し屋遠藤の兄は太平洋戦争中、上官の命令を受けて原住民を殺害し、戦後、軍事裁判にかけられ処刑されたのである。山谷に泊った翌朝、遠藤はガストンにこう話している。

「あんた、戦争に行ったかね」
ガストンは首をふった。
「おりゃ、行ったよ。……おれのうちじゃ……兄貴も戦争にとられてな」
遠藤は苦しそうに時々、目をつむりながら話しつづけた。小雨がまたちらつきはじめたが、遠藤はレーンコートのえりを立てようともしない。……中略……
「おれの兄貴は……戦犯で死刑になってな」……中略……

「本当に処刑されねばならない連中は、今でも生きてるんだ。この日本にらくらくと戻り、口をぬぐって生きてやがった」

（第７章　わな）

以上、二つのハンディを設定することにより、殺し屋遠藤は単なる悪役ではなく、暗い過去ゆえに殺し屋に転落した、情状酌量の余地ある哀しい人間として読者に印象付けられている。

こうした人間にふさわしいイメージとして、殺し屋遠藤は冷たい雨や霧を伴って描かれている。まず殺し屋遠藤が最初にガストンの前に登場する場面を見てみよう。

レーンコートのえりを立てて一人の背のたかい男がガードの下からあらわれた。病気であろうか、手を口にあててせきをしている。

（第５章　東洋の隠者）

服装からして雨のイメージである。この後、ガストンは無理やり車に乗せられ、殺し屋遠藤とともに山谷の安宿に向かうのである。ここで雨が降って来る。

車の窓にひびでも入れたように――
二すじ、三すじ……斜めに水の滴りがぶつかって流れだした。
「遠藤さん、雨だぜ」
そう仲間に声をかけられても、遠藤はぬれた窓に顔をじっと押しあてて黙っている。

（第６章　山谷の夜）

この少し後に、「５」で例示した、雨の中を行く車で、ガストンが殺し屋遠藤に、病気かと尋ねる場面が出てくる。

殺し屋の心の底に、兄の命を奪われた青年の切ない過去が秘められていた。その哀れな境遇に読者の共感を集めるため、遠藤周作は殺し屋遠藤を雨男としてまずアピールした。しかし、殺し屋遠藤が第一のターゲット金井を銀座の工事現場に連れ込んで暗殺しようとする場面では、例外的に真昼の太陽に向かって変化させている。「第７章　わな」から「第８章　信ずることと疑うこと」にかけて、この気象の変化は七箇所にわたって描かれている。このうち四箇所を引用しておこう。

①　朝飯がすむと――
　遠藤とガストンとは一ぜん飯屋を出た。空は相変らずどんよりと曇り、霧雨がばらついている。
②「いよいよ、きましたぜ。銀座に」（論者注　車の運転を務める暴力団員梅崎の発言）
　雨は少しずつあがってきた。鉛色の空が白んで、目ぶたに重いほどの陽光が照りはじめた。

（以上の①②は、第７章　わな）

③　遠藤はあたりを見まわした。足もとには砂利と砂とを入れた大きな箱とセメントの袋が

積みかさねてある。まぶしい陽がその袋にあたっていた。

④　遠藤はだまって足もとのセメント袋の上に倒れているこの小肥りの男を見おろしていた。汗の玉が金井のはげ上った頭に浮いている。

冷たい笑いが遠藤のほおにゆっくりと漂った。鉄をうつ音、鉄をやく炎の響きがまたきこえてくる。遠藤の手にはいつの間にかあのコルトの拳銃が握られていた。

コルトを遠藤が指さきで回転さすたび、陽光がキラキラと黒いつめたい銃身に光る。

（以上の③④は、第 8 章　信ずることと疑うこと）

殺し屋遠藤が銃の引金を引くところまでは、作戦通りである。読者も「遂に仇討ち一回戦成功」と思わせられる。この強い殺し屋遠藤だけは、陽光のイメージ、晴れ男なのである。

しかし、病のさらなる悪化もものかわ、山形まで第二のターゲット小林を暗殺しに行った場面では、もはや晴れ男のイメージはない。殺し屋遠藤とターゲット小林の駆け引きと格闘が繰り広げられる「第 12 章　暗い沼」においては、実に 15 回にわたって雨や霧の描写が登場する。カウントの仕方によっては、その数はさらに増える。このうちの一つが「5」で例示した「休まないか」という殺し屋遠藤の言葉で始まる場面である。さらに三箇所だけ引用しておこう。①は兄の仇討ちを目論む殺し屋遠藤を小林が山の沼に連れ込んで逆襲しようと、チャンスをねらいつつ山を登ってゆく場面。②は格闘の場面。③は瀕死の重傷を負いながらも二人の殺し合いを止めようとするガストンの剣幕に、小林が逃げ出し、殺し屋遠藤が気絶した後の場面である。ガストンは（描写されてはいないが）沼底に沈んだものと思われる。

①　もうどのくらい登ったであろう。

平野がつきると、そこからは富島山の坂道にかかる。四〇二メートルという余り高くもない山ではあるが、道は急な坂だった。平野から見ると山は晴れていると思っていたのに、登るにつれて昨日と同じように、細かな霧雨がふっているのがわかった。

②「エンドさん」

銃声を耳にしたガストンは両足を泥の中に入れたまま、声をかぎりに殺し屋の名を呼んだ。

沼の上に風がふいて……霧をわずかだが反対側の岸に押しやった。そのわずかな空間の中に、ガストンはシャベルをふりあげている小林と沼に足を入れた遠藤の姿を見た。

③　暗い沼は凄惨な死闘を忘れたように静まりかえっている。

時々、風が吹いてふかい霧が散り、時々風が吹いて、ふかい霧が集ってくる。

木々が身ぶるいをしながら枝の雨だれを払いおとすほかは、なんの音もきこえぬ。

（①②③いずれも第 12 章　暗い沼）

第一のターゲットだった金井暗殺計画の際は、遠藤の病状はまだよく、殺害予定場所に関する土地勘もあった。しかし、小林暗殺計画においては、病状は悪化しており、土地勘もなく、殺し屋遠藤は小林の逆襲の危険に曝され続けている。読者は一人残らず殺し屋遠藤の危機を感じつつ、読み進むことを強いられる。この場合の殺し屋遠藤は、惨めにも雨と霧の中でずぶ濡れになるのである。

このように、追い詰められた心境においては雨や霧、順調な場面では太陽や青空を登場人

物にだぶらせる手法は、大衆小説第三弾、「私が・棄てた・女」の森田ミツの描き方でも用いられている。この点は一年前に述べたので詳述しない。

## 6 「おバカさん」におけるガストンと自然描写

最後に主人公ガストン•ボナパルトにどのような自然描写が重ねられているかを論じよう。既に「3」で先述したとおり、ガストンには夜空に瞬く星の描写が意図的に用いられている。とりわけガストンの人生観や生き方を描く場面でそれは顕著である。しかし、まずは初登場の場面に注目しよう。ガストンは船底の暗い四等船室で隆盛・巴絵兄妹と出会う。

昼だというのに、シーンとした真暗な船倉に足をおろした。
豆のように裸の電球がポツ、ポツともっている。すみの方には鎖で結びつけたキャンバス•ベッドが並んでいる。円窓から外の陽の光がほこりをうきしずみさせて流れこんでいた。
そのキャンバス・ベッドの一つに……
背のものすごく高い男が信玄袋のようなサックをひざに乗せて、しょんぼり坐っていた。
「ガストン・ボナパルトさんですか」
遠くから隆盛が声をかけると、その相撲とりのような男は、とびあがるように立ちあがって、
「ウィ……はい、はい、はい」
巴絵は思わず息をのんだ。
(馬……)
馬がヌッと立ちあがって、こちらを向いた時、巴絵ののどもとにこみあげてきたのはまずこの言葉だった。

(第2章　主人公登場)

ここはまだ、象徴的という程度の域を出ないとも言えよう。最初に鮮明な星のイメージが描かれているのは次の場面である。新宿でヤクザに絡まれた晩、ガストンは一週間ほど世話になった隆盛の家を突然出て行った。遠藤周作は、作者目線を基準としつつ、ガストン目線を何度も交えながら筆を進めている。

星がまたたいている……
鋭く光る星もあれば、やさしくうるむ星もある。その星くずのきらめく銀色の夜空を見あげていると、自分の体にも翼がはえて、吸いこまれていくような気がする。
子供の時からガストンは星を仰ぐのが好きだった。日本にくる船の甲板でも、深夜、空を見あげて……あさがたの乳色の空に地中海で見た星、アフリカの暗い夜空に光っていた小さな星、インド洋の上にも今と同じように無数の星がきらめいていた。
星は変わらないが、自分は――思えば遠く日本まできたものだ。そして今夜、また一人ぼっちになってしまった。
どこへ行こう。どこに行くあてもない。今夜泊る場所もない。しかしこれは自分が選んだ生き方なのである。

（第 4 章　一人ぼっち）

かつて船底の四等船室でフランスに渡航し、また日本に戻ってきた遠藤周作の追憶をそのまま描いたかのような描写である。遠藤周作は疾風怒濤のフランス留学中の自己を思い起こしつつ、立場を変えて人生摸索中のフランス青年ガストンに日本の夜空に瞬く星を見詰めさせている。ガストンはどんな星か。「やさしくうるむ星」である。

星の描写は、その後何度か繰り返されるが、同じ第 4 章の次の場面は、まさにガストンの生き方が星に重ねられている。

この老犬もきっと石をぶつけられたり、追いはらわれたりしてきたにちがいない。同じようにガストンも子供の時、兄弟や友だちにいつも嘲笑されたり、ばかにされてきたのである。

ガストンの生れたサボア地方では間のぬけた大男のことをポプラの木とよぶ。ポプラの木はマッチの棒にするほかには材木にも柱にもできぬからだ。だからガストンは友だちからポプラとアダ名をつけられていた。

でもガストンは人間を信じたかった。この地上の人間がみんなナポレオンのように利口で、強い人ばかりではないと思った。この地上が利口で強い人のためにだけあるのではないと思った。

自分やこの老いた犬のような――

弱くて、悲しい者にも何か生きがいのある生き方ができないものだろうか……

あの空の星のなかにもきっと自分たちと同じような星があるにちがいない。鋭い光を放つかわりに、弱々しい、しかしやさしく光る星だってあるにちがいない。意気地ない自分だが、懸命に生きれば、そんな星の美しさのひとかけらでも奪うことはできないかしら……

（第 4 章　一人ぼっち）

遠藤周作の言わんとしていることはこうだ。弱々しいが、やさしく光り、うるむ星。それは弱く、意気地なしで、人からばかにされ、悲しみに耐えながらも懸命に生きる人間のシンボルである。

つまり、この小説において、星はガストンの人生観や生き方を象徴しているだけではない。名もなき、弱き大勢の人間の象徴でもあるのだ。そのことは次の場面からも読み取れる。以下の場面で老人と出てくるのは、隆盛の家を飛び出したガストンが出会った占い師蜩亭老人。ねこ背の女とは占いをしてもらった客である。

ガストンはこの老人にも、この老人の前にそっと手をだした今のねこ背の女にも、ふかい憐憫の情をおぼえていた。あのねこ背の女はひどく悲しげな顔をしていた。子供が病気なのか……それともこれからの自分の生活について途方にくれているのだろうか。ガードのむこうには昨夜のように無数の星がまたたいている。

（あの星と同じ数だけの人間がこの地上に生きている）遠い海をわたったガストンにはこのことがよくわかるのだった。（あの星と同じ数だけの不幸や悲しみや辛さが地上にちらばっている……）

ガストンはそうした人間のためになにかをしたかった。不器用は不器用なりに、のろまは

のろまなりになにかをしたかった。

（第５章　東洋の隠者）

ここに来ると、星はガストンの人生から、多くの民衆の人生という意味に、そして多くの不幸や悲しみのシンボルにまで拡大していることが分かる。

次の場面は、殺し屋遠藤に捕捉されたガストンが車に無理やり乗せられ、山谷の安宿に向かっているところである。車は途中で検問中のパトカーに出くわすなど、ガストンは隙を突いて逃げようと思えば逃げ出せる状況にある。しかし、彼は逃げなかった。ナポレオンとはガストンが来日初日に見つけて仲良くなった野良犬のことである。

雨はますます激しくなった。その雨のなかを車は一時間ちかくも走りつづける。頭をかかえてうなだれているガストンの耳には――

車のリズムある振動がさまざまの人間の言葉のようにきこえてくる。それは時には懐かしい巴絵の声であり、隆盛の声でもあった。

（逃げるの、逃げるのよ。ガスさん）

それから突然、このリズムは蜩亭老人の痛切な訴えにも変った。いや、それは蜩亭老人の声ではなく、もっと別な目に見えぬ存在のささやきだった。

（信じないの……どんな人間でも信じるつもりではなかったの……）彼の目ぶたの裏には夜空にきらめく星の光がよみがえった。ヨロヨロと最後まで自分を慕って追いかけてくれたナポレオンの姿も浮びあがってきた。

（第６章　山谷の夜）

「もっと別な目に見えぬ存在のささやき」とは、遠藤周作がこの後、多くの小説で用いることになる手法である。単純に言えば、日本人がしばしば用いる「天の声」に当たる。人物の本音や本能にブレーキをかけ、時には甘えを断ち切り、邪悪な心を戒める潜在的な良心、正義感である。孟子に言わせれば「惻隠の情」。ここでガストンは夜空の星に「人間を信じよ」という「天の声」を聞いている。それはガストン自身の「心の声」でもある。

ガストンの人生観や生き方を夜空の星で象徴しようという遠藤周作の作戦は、用意周到に、他の登場人物の言葉を通しても描かれている。この作家がしばしば読者にアピールしてくる一種の「駄目押し」の手法である。私は「緻密なストーリーの鎖」と呼びたい。

以下は、殺し屋遠藤の金井暗殺作戦を妨害した結果、ピストルの柄で殴られ気絶したガストンが発見され、とりあえず隆盛の家に戻った場面である。

その夜、ガストンと枕を並べた隆盛が、真よなか、ふと目をさますと、いつ寝床をぬけだしたのであろう……当のガストンはチンチクリンの寝巻姿のまま、窓ガラスに顔をおしあてて夜空をながめていた。

「ガスさん」

「はい……」

隆盛も起きあがって煙草をくわえた。やみのなかで煙草の赤い火が明滅する。しずかだった。

隆盛にはガストンがナポレオンのことを考えているのがよくわかった。だから彼はそのことにはふれずに、
「星がきれいだなあ……ガスさん」
「はい」
「ガスさん、星を見るのが好きだね」
「はい、好き」
真っ黒な夜空に懸命にまたたいている星くずの光――隆盛は今までガストンのように心の素直な男を見たことがなかった。星がその小さな光を懸命に夜空でともすように、この男は人生を自分の心の素直さで守ろうとしている。

（第 9 章　星よ光れ）

最後の一文。星の光＝心の素直さという図式的な表現が、ガストンを夜空の星で象徴させようとした作者のねらいを証明している。

## おわりに

「『おバカさん』においては、晴天、雨と霧、夜空の星の描写が、主要登場人物の三者に振り分けて描かれ、『私が・棄てた・女』よりも多彩な構成となっている。」
わたしは「はじめに」でこのように述べた。拙文の「４」から「６」において、かなりの引用を用いながらそのことを証明してきたつもりである。いささか引用が長すぎて、その分、論考に比して引用が多すぎたかとの懸念もある。しかし、結果的にこの最終稿の分量になったのは、初の大衆小説、そして新聞小説において、遠藤周作がいかに巧みにストーリーを構成しているかということを、お読み下さった方に伝えたいためである。
「作家は処女作に向かって成長する」という有名な言葉がある。その意味は作家が持つ創作動機、つまり小説に描いて世に問わずにはいられない作品の主題に関して引用されることが多い。しかし、私は小説の表現技巧、たとえば自然描写の活用の仕方といった面でも、上の言葉は当てはまると考えている。
今回の論考でも、出世作「白い人」や、「おバカさん」以後の「私が・棄てた・女」などの作品との手法の類似性について、わずかに触れたのであるが、他にも前後の作品との関連性を指摘したいと思いつつ、紙面の都合で割愛したものがいくつかあった。
一年前の論文の「あとがき」でも述べたように、「この作品が読者の心を打つのは、作者がどんな巧い書き方をしているからなのか」という、作品の作り方と出来栄えを論ずる視点による作品分析を、私は今後も続けたいと考えている。差し当たっては、遠藤周作の大衆小説第二弾「ヘチマくん」について機会があったら論文にすべく、作品分析を進めたい。また、遠藤周作は後に昭和 52 年発表の小説「悲しみの歌」の中でガストンを再登場させている。「ヘチマくん」に続いてこの作品についても分析してみたい。これが当面の計画である。

## 参考文献（順番は著者・代表編集者のあいうえお順、次に雑誌とした）


江藤　淳・他著　「群像　日本の作家　22　遠藤周作」　小学館
江藤　淳　筆　「おバカさん」解説文　角川文庫昭和 48 年 5 月版
笠井秋生・玉置邦雄　編　「作品論　遠藤周作」　双文社出版
笠井秋生　著　「遠藤周作論」　双文社出版
上総英郎　著　「十字架を背負ったピエロ　～狐狸庵先生と遠藤周作」　朝文社
広石廉二　著　「遠藤周作のすべて」　朝文社
藤田三男　編　「追悼保存版　遠藤周作の世界」　朝日出版社

雑誌　「国文学　解釈と鑑賞　1975 年 6 月号　遠藤周作の文学世界」　至文堂
雑誌　「国文学　解釈と鑑賞　1986 年 10 月号　特集　遠藤周作」　至文堂